

草

二年 画数 9
筆順 艸 昔 草
オン ソウ
クン くさ

成り立ち



「草」は、むかしは「艸」という字で、「くさがふたばを出したかたち」をあらわした字でした。それで、これだけで、いまの「草」とおなじつかいかたをしていましたが、音がソウでしたので、その音をあらわす「早」をくわえて、「草」という字になりました。

草は手入れをしなくても、ひとりでに生え、のびますので、「手入れをほどこさない」「そまつな」という意味につかわれます。「草稿」「草案」「草案」「草屋」などのことがこれです。

使い方

▽ひろい牧場にはたくさんさんの牛がいて、のんびりと牧草をたべていました。足もとにはかわいい草花がさいいて、虫がみつをすっていました。かえりに葉草をつんできました。

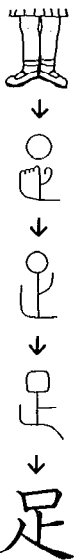
熟語例

- ▽牧草(牧場の草。また、かちくにたべさせる草)
- ▽草花(草にさく花。また、花のさく草のこと。また「草と花」のいみにつかいます。)
- ▽葉草(薬のざいりようになる草。ほしてこなにしたり、酒につけたり、せんじたりしてつかいます。)
- ▽雑草(さいばいしないのに、ひとりでに生えてくる「いろいろの草」のことをいいます。)
- ▽草稿(文章の下書きのこと。)
- ▽草案(草稿と同じいみのことばです。また、「下書きのじょうたいにある意見」といういみにつかいます。)
- ▽草書(書き方をもっともくずした書体です。草稿を書くときにつかうといういみで名づけられました。)
- ▽起草(草案に起こすといういみのことばで、草稿を書きはじめることをいいます。)

足

二年 画数 7
筆順 一 口 甲 足
オン ソク
クン あし・た 11 ける 11 する

成り立ち



「あし」のうらのかたちをあらわした「止(止)」と「ひごごぞう」のかたちをあらわした「口(口)」とをくみあわせた字で、「ひごからしたの「あし」をあらわした字です。

「あし」をあらわした字には「脚」という字がありますが、これは「あしぜんたい」をあらわした字です。しかし、いまでは、「足」も「あしぜんたい」のいみにつかわれるようになりました。また、「満足(たまる)」というつかいかたなど、「たりる」「たる」「たす」というつかいかたがうまれました。

「足」の形いろいろ

止、止、少、五、中、処。

使い方

- ▽「うらどう不足」で「遠足」にいったものですから「満足」にあるけなげばかりか、「足首」をいためてしまいました。
- ▽「足り」ないところは「補足」して、「充足」してください。

熟語例

- ▽足首(くるぶしの上の、足のいちばんほそいところ)
- ▽遠足(「足をつかって遠くまでいく」といういみのことばです。)
- ▽長足(「足はなが長い」といういみのことばですが、「足がはやい」ことから「しんぱがはやい」といういみにつかわれます。例「長足の進歩をとげた。)
- ▽不足(「足りない」こと。「不」は「ない」)
- ▽補足(「補い足す」といういみで、「足りないところを補って足りるようにすることです。つけ足し」)
- ▽充足(「充」は、「満たす」こと。「充分」。「充分に足す」こと。「足して充分なものにする」こと。)
- ▽満足(「満」は「満ちる」こと。「充分に満ち足りる」こと。「のぞみがかなう」といういみです。)